

# 明代白話小説ノ一ト

— 短篇小説・「三言」(二一—)

尾上兼英

## 一 まえがき

士人の文藝に對して、庶民の生活を反映した説書・説唱も長い歴史があり、<sup>(1)</sup>唐代には佛教の普及を目的とした俗講が加わる。また雜伎の一種として傀儡と影戯があり、舞踊戯・雜劇がある。これらが、宋代の瓦市における各種の演藝を生み出す背景となった。

明代になって説書がテキストの形で定着し出版されるようになると、いよいよ本格的に庶民の文藝——白話小説が定立する。その初期におけるものは、説書人の手控えとしての「話本」の面影を残しており、<sup>(2)</sup>明末から清代へかけての「擬話本」<sup>(3)</sup>ほどには文人の作爲が加えられていないと推察される。従って短篇白話小説の總集として馮夢龍によつ

て編纂された「三言」に描かれた各階層の人物像は、庶民——この場合の庶民は、語り物の聴衆から、讀書力のある商工民、中下層地主までを含む——の目から見たありように近いものと考えることができよう。小論は、作中人物を通して當時の社會各層を形成する人物のモラルを探るのが目的である。

「さきに「——短篇小説・「三言」(一)——」(『東洋文化研究所紀要』第44冊)において、女性の生のありかたについて述べたが、それは、女性をしはる徳目についての各階層別および環境、個性による女性の對應のしかたを、主として作品中に頻出する俗諺を手がかりとして見たものであった。男性の場合も、ほぼ同様の手順をふんで解明したいと考えるが、女性は三従(孝・貞)という一元的な徳目で總括できるの<sup>(4)</sup>に對して、男性の場合は、階層・職業等によって反應は一律でないため、作品中に登場する男性像を階層別にし、作品の主題・構成を含めて考察を進めることとする。

## 二 士人と庶民

まず體制内の諸人物を、支配階層と生産に従事する被支配階層にわけ、それぞれの生活態度と説書人の關心のむけかたに焦點をあててみよう。

### 1 帝王

皇帝は庶民の生活には遠い存在であり、従って作中人物としての人氣はないが、庶民から見た帝王には、ある種の

期待と拒否反應が見られる。

\* 王言如天語

皇帝は徳の高い人という理念で支えられているが、實際は權力によってその座が保證されているにすぎない。權力のもつ威力は、その氣まぐれな一言によって、他人の運命を左右する。「王言如天語」(恆12)であれば、その歸結は「違背聖旨、罪該萬死」(恆12)ということになる。

典型的な逸話は、佛印禪師の度牒である。

謝端卿は若くして古今の學を修め、釋・道二教にも通じていたので蘇東坡もその才名を聞いており、科學の受験のため上京した端卿を招いて談論し莫逆の友となる。

たまたま早魃のため大相國寺において雨乞いの祈願が行われることになり、願文の起草を翰林學士蘇東坡が命ぜられる。

祈願法要の際、端卿は神宗拜顔を希望し、東坡の手引きによって偽寺僧となり、茶を進めて神宗の目にとまる。

端卿に好感を抱いた神宗は、法名を了元、法號を佛印と賜わり度牒を與える。——説書人によれば、當時は度牒を得るために錢千貫を要したので、これは思いがけない幸運にめぐりあったことになる。しかし、端卿は東坡と伯仲する學殖によって官僚となるつもりで上京したのであるから、素志に反した前途が與えられたことになる。(佛印師四調琴娘「恆12」)

蘇東坡と佛印の交友に關しては、もう一篇あり、それによると、兩人の前生はいずれも和尚である。僧侶については後述する豫定なので、交渉に關する部分にのみついて見ると、

謝瑞卿トクは「功名之事」にはまったく關心がなく、蘇東坡と同窓の學友であるが、官僚となることをすすめる東坡と、佛教の修行をすすめる瑞卿とは始めから意見が合わない。科擧に合格し翰林院學士となった東坡は、瑞卿に上京して官僚の道へ進ませようと考え、瑞卿は東坡が佛教反對の行動に出ないよう翻意させるため上京する。

たまたまた大旱魃のため、宮廷で雨乞いのため「黃羅大醮」(天神、地祇、鬼神に懺悔して祈願する祭祀)が行われ、瑞卿は道人の姿をして東坡の供をし、仁宗の目にとまって度牒を與えられ、大相國寺で修行をする。(明悟禪師趕五戒)古30の後半)

もともと架空の物語なので「至今流傳做話本」(古30)とはいうものの、説書人の解釋が二様に分れていたこと(5)を示し、古30は天子の氣まぐれで本人の希望が偶然かなえられたのであるが、恒12の場合は一人の運命が變えられたことになる。

皇帝と逢うという偶然は、右の二話に見られるように、本人にとって運命を決することにもなる。似た例を他に求めれば、

襄陽第一の詩人、孟浩然が上京して宰相の張説に詩才を認められ、中書省の一室で歡談中に唐の明皇が張説の所へ來て浩然の姿を見、かねて評判を聞いていたので得意の詩を朗誦させる。それが、

北闕休上詩 南山歸敝廬 不才明主棄 多病故人疎 白髮催年老 青陽逼歲除 永懷愁不寐 松月

下窗虚

の詩であり、それに對する明皇の感想は、「偏述枯槁之辭、又且中懷怨望、非用世之器也。宜聽歸南山、以成其志」<sup>(6)</sup>であつて、官僚としての道をとざしてしまふ。<sup>(7)</sup>（衆名姫春風弔柳七」入話 古12）

こうした氣まぐれが良い方に働いて欲しいのは、團圓を好む聴衆と説書人にとっては當然のことであつて、その類型が「趙伯昇茶肆遇仁宗」(古11)と「兪仲學題詩遇上皇」(通6)に見られる。いずれも科擧受験のために上京した者が不合格となり、都でその日暮しの状態となるが、これらまったく希望を失つた人物が、偶然のことから皇帝・上皇の氣まぐれによつて僥幸を得る物語である。

趙伯昇は一字の誤用(科擧の答案中に俗字を用いた)を仁宗に指摘されて不合格になるが、茶坊の壁に落書した二首の詞が徽行の仁宗の目にとまる。たまたま仁宗が、九輪の太陽を載せた馬車に乗つた金甲の神人の來訪を受けた夢を見、九輪の太陽旭、伯昇の名が旭であるため、仁宗は零落した趙旭を西川制置の職を與えて郷里に錦を飾らせる。(古11)

兪仲學は上京の途中で病氣のため路銀を使い果し、その上、試験も不合格となつたので秀才の姿を見ると酒食をたかつて日を過すまでに窮迫する。孝宗に位を讓つて上皇となつた高宗は、西湖に遊んでいると金光の中に黒氣が二本立ち上る夢を見、それは不遇な賢人がいるのだという解を得て徽行するうち、豊樂樓の壁に落書してある詞の作者、兪仲學を見つけ出し、成都府太守とする。<sup>(8)</sup>(通6)

古11は單純なストーリーであるが、通6は司馬相如と卓文君の逸事を入話とし、さらに一挿話がある。

上皇が靈隱寺で容貌のすぐれた一行者から來歴を聞き、もと南劍府太守であったと知るや、孝宗に原官復歸を命ずる。宰相は「贓汚浪籍、難以復用」と再三反對し、そのため實現しない。すでに勅命を受けて再任されていると期待した上皇は、行者と逢って面目を失い、孝宗に「樹老招風、人老招賤」と嫌味をいう。孝宗は宰相にむかって「此是太上主意。昨日發怒、朕無地縫可入。便是大逆謀反、也須放他」と原官復歸を嚴命する。

この挿話は、皇帝の仁慈という觀點から描かれているが、上皇の體面を保つために「たとえ大逆謀反人であろうとも、放免せよ」ということになれば、宰相の立場からすれば政治的には無原則、秩序維持にも責任の持てない事態となる。しかし、皇帝の側から見れば「野に遺賢無からしむ」という善政であり、受験生にとっては才能があれば必ず見出されるという希望になり、こうした信賴關係の實現によって體制が維持されていることを、説書人は見抜いているのである。通6は上京して不合格となった受験者の苦勞を見て、上皇が郷試の制度を開いた緣起説話としているが、いづれも夢を媒介としているのは、いかにも稚拙な作品である。「無巧不成話」(恒3・20・29・32)というわけで、話術だけで聞かせたものであろうか。

これらは「一子受皇恩、全家食天祿」(古11)の「發跡」の物語でもある。

\* 重賢輕色

君臣の和をめぐって、皇帝の場合は一方通行であったが——帝の恩を受けた人物の報恩譚がない——皇帝に準ずる諸侯と臣下、あるいは將軍と部將の場合は、相互援助によって物語が成立する。

春秋時代の楚の莊王の宴席で風のため灯が消え、それに乘じて莊王の愛妾にたわむれた男がいる。妾はその男の冠の纓をひきちぎって王に訴えるが、王は同席の全員に纓をちぎることを命じ、灯をつけて宴を續ける。その後楚との戦争で苦境に陥った際、一勇將——それが問題の人物——の奮戦で危機を脱し、一代の覇者となる。<sup>10)</sup>

これに對する説書人の批評は

世人度量狹窄、心術刻薄、還要搜他人的隱過、顯自己的精明。莫說犯出不是來、他肯輕饒了你。這般人一生有怨無恩。但有緩急、也沒人與他分憂替力了。

とあって、一般論として他人のあら探しをし、それによって自己を顯示しようとする人物に非難の目が向けられている。従つて度量の大きい人物には、それにふさわしい見返りがなければならぬと考へるのが、バランスを重んじる庶民の感覺でもあるので、報恩譚が必要となるのである。

正文は、この入話のバリエーションである。

五代梁の太祖を助けた葛周は、宴會の席で愛妾の弄珠兒に見とれて質問にも答えない申徒泰を罪に問わず、逆に優遇したので、感激した申徒泰は、唐の李存璋との戦鬪で單騎敵中に突入して勝利の機運を開く。そこで葛周は功績を朝廷に報告するとともに、弄珠兒に邸と持參金をつけて申徒泰の妻として與える。<sup>11)</sup>

このことが軍中に知れ渡ると、「没一個人不誇揚令公仁德、都願替他出力盡死」となり、「人心悅服、地方安靜」と太平の時代を迎えることになる。（「葛令公生遣弄珠兒」古6）

「重賢輕色古今稀、反怨爲恩事更奇」の結句が示す通り、これは少ないケースであつて類話がない上、説書人の共感も薄いため作品にも生彩がない。

\* 輕賢好色

これはモデルに不足はないはずであるが、「三言」中には玄宗皇帝と楊貴妃のラブ・ロマンスはなく、隋の煬帝と金の海陵王がヒーローとして登場する。

煬帝は文帝の五人の息子の中で両親に取り入り、楊素に擁立されて太子の勇を失脚させ、父の死後、勇を殺して即位する。楊素が文帝の亡靈に違約を責められて死ぬと煬帝は女色に溺れ、「迷樓」と名づける宮殿に女性を侍らせて歡を盡くす。

また會遊の地、陳の後主を亡ぼした江南への旅行を思いつくと、蕭後のすすめに従って大運河を造ることとし、十五歳以上五十歳以下の男五百四十三万余人を動員して掘鑿させ、大船五百隻を建造させる。そのため民衆は家産を傾け、子女を賣って費用を捻出する。

完成すると吳越間の少女五百人と羊に船を引かせて南下する。かくて人心は離反し、天象觀測の結果は大凶と出て覺悟をきめる。氣に入りの侏儒王義は上書して失政を諫め、自刎する。間もなく、側近の將軍三人が反亂を起して自殺を強いる。後、唐の太宗は迷樓を見て「此皆民膏血所爲也」といって焼き拂う。(隋煬帝逸遊召譴「恒24」)

これは宋元間に流行した『南部煙花錄』(別名『大業拾遺記』『隋遺錄』)『煬帝海山記』『煬帝迷樓記』『煬帝開河記』に基づいて改編されたものである。文體も文語であり、ディテールの描寫も缺けていてよい作品ではないが、「阿諛人人喜、直言個個嫌」(通17)の人間の弱點と「王言如天語」が結合した皇帝のもたらしものを明らかにしている。



海陵王は宗室の子であるために高位に即くと、崇義節度使の妻に懸想し、首尾を遂げるとその夫を殺害させる。同じく太祖の孫である熙宗を殺して帝位に即くと、美人と評判の女性を手當り次第に召し出し、夫を刑死させるか追放する。そして舊夫を思う女性は斬殺、また召した女性に手を出した男を殺してその妻を奪い「朕亦淫其妻、以報之」とうそぶき、自分が妻を召し上げた男にその女を與えたりする。また再従兄の妻を奪い、その娘にも手を出し、寵の衰えた女性は男装させて后妃に侍らせるなど想像を絶した非道を行う。(「金海陵王縱欲亡身」恆23)

海陵王の所業は北方異民族の婚姻慣習を考慮するとしても、全篇が殺と淫で満たされており、<sup>(14)</sup>流布本で削除されたのは當然といえよう。

兩篇とも反亂によって皇帝に死を與えるが、これが説書人の最大の抵抗であろう。<sup>(15)</sup>「將來之戒」とするためこのよ  
うな物語をするというのは、説書人のきまり文句であるが、<sup>(16)</sup>好色について、帝王と庶民の相違は明確に區別している。  
庶民の場合は「我不淫人婦、人不淫我妻」(古1)「不聽好人言、必有恟惶淚」(恆9)であって「平人所有者、不過  
一身一家、就是好色貪淫、只還心有餘而力不足」で終ることである。しかし、帝王であれば「富有四海、何令不從、  
何求不遂」なので、一人の愛妃に溺れたとしても「小則政亂民荒、大則喪身亡國」(恆23)という事態になる。この  
小と大の関係は、民衆の生活に及ぼす影響から見れば「政亂民荒」の方が直接的であり、「喪身亡國」は天子の一身  
上の問題にすぎない。この大小の関係は士人の常識であり、馮夢龍作と擬せられたり、明代の作品と比定されるのも  
肯綮に當る。

この兩編には、説書人の同情はまったく見られない。「自古安有不亡之國、不死之主乎」(恆24)あるいは「世上那

有百世太平、千年天子」(恆23)と冷やややかに突き放し、さらには「大抵朝廷之事、虎頭蛇尾」(古39)と、手のうちは見えているといわんばかりである。強いていえば、姐己・褒姒・飛燕・楊貴妃に迷って「政亂民荒」を招いた天子と比較して、北方系の皇帝は禽獸に近いとする意圖が見られるが、語り物の例に従えば「淫穢鄙褻」を、これらの帝王を例として名分にかこつけて語ったと解する方が自然であろう。<sup>(12)</sup>

皇帝に関する説話では、もう一編「梁武帝累修成佛」(古37)があるが、これは參禪悟道の物語であって、とくに皇帝の地位を主題としたものではない。千佛寺門前の庭の「白頸曲蟻」が、法華經の功德によって人間に轉生し、また轉生をして梁の武帝となる趣向にやや目新しさがあるが、皇帝も、もとを正せば「みみず」であつたというほどの意圖があつての物語ではなく、佛法の利益を説く方に重點がおかれている。

## 2 官 人

「升官發財」は人のひとしく望むところであり、それを實現する確實な方法は官僚となることである。それを端的に示すのは「做官的、一來圖名、二來圖利」(恆26)あるいは「一則冠蓋榮身、二則官戶免役」(通25)である。後者は「納粟買官」の理由として語られるので時代は降るが、いずれにせよ、官僚となる目的を明示しており、明代の説書人の目から見た官僚は、本來もつべき使命感が脱落していることをみごとに物語っている。

したたかな説書人の目は「爲人民父母」(通26・恆13)「父母官」(通9・恆29)であるべき官僚の本質を正確に見抜いているのであるが、これは庶民の側から見た一方的な見解とばかりはいえない。科擧の制度は、本來門閥貴族の

手に集中した政權參與の權利を、廣く有能な人材に開放するという理念のもとに成立したものであるが、登用する側も時とともに功利的になってきたことを示す好例がある。

富貴不用買良田 書中自有千鍾粟

安居不用架高堂 書中自有黃金屋

出門莫恨無人隨 書中車馬多如簇

娶家莫恨無良媒 書中有女顏如玉

男兒欲遂平生志

六經動向窗前讀 (宋眞宗皇帝勸學文『古文眞寶』)

この詩の前四聯の上句に提示されているのは、世俗的な欲望以外の何物でもなく、それに對應する下句は、六經こそ欲望充足のための根源であるという因果の關係を示している。結びの句の「男兒平生志」は、含みのある語句であるが、文脈に従えば、前四聯の欲望の中に收斂され、天子自ら官僚志願者に經綸を求めていなかったということになる。かくて、功利的な官僚候補は當初から民衆と無縁の存在であることが公認されていることになり、それをうけて讀書人の家庭では「家無讀書子、官從何處來」(通24)と子弟を叱咤激勵する。試験に合格すれば、「分明乞相寒儒、忽作朝家貴客」(古5)となりうるからである。

こうした環境で、こうした目的のために、讀書人の子弟たちは受験準備が強いられた。

\* 一舉首登龍虎榜 十年身到鳳凰池

受験のための生活が早く終ることは誰しも願うところである。「十年受盡窗前苦、一舉成名天下聞」(通24)の望み

が、もし「一擧首登龍虎榜」(通14)ともなれば、眞宗皇帝の詩に示された人欲は十全に充足される。しかし、それは「胸中書富五車、筆下句高千古」(恒35)「文章蓋世、學問驚人」(通9)という文才と學殖をもつてしても、容易に果せぬ夢である。なぜならば、説書人から見た科擧の實態は「請托者登高第、納賄者獲科名」(通9)だからである。

そこで「請托」「納賄」によらぬ方法が案出される。

科擧に落第した李元という男が、郷里から父の任地へ向う途中、吳江まで來た時に偶然子供にいじめられている小蛇を見つけ、買い取って逃がしてやる。その後、そこを通ると西海龍王の使者が迎えにきて龍宮に案内する。小蛇は龍王の王子であったので命の恩人としてもなされ、別れ際に謝禮として望むものを問われる。「安敢過望、平生但得稱心足矣」と答えると、幼名を稱心という龍女を妻に與えられる。李元のいった意味は「臣所欲稱心者、但得一擧登科、以稱此心、豈敢望天女爲配偶耶」であったので固辭するが、龍王は「若欲登科、只問此女、亦可辨也」といって婚約を取り消さない。

龍女を伴って受験に赴くと、龍女は神通力によって前日のうちに問題を盗み出し、豫め答案を作るようにすすめる。かくて三回の試験をすべてこの方法で受け、優秀な成績で合格して任官する。やがて三年の約束の期限が満ち、龍女は天に去る。(「李公子救蛇獲稱心」古34)

この物語は、唐の傳奇「柳毅傳」を改編した獸類の報恩譚であるが、科擧の試験と結びつけている點で、假空の物語に説書人から見た現實社會がわり込んでいる。報應という點に重點をおいているが、どうも眞面目にみても、まとも

な受験とはいえない。讀書人の切ないまでの科擧への執心と、科擧の實態の裏をかいた痛快さを、説書人の目から読みとることができよう。

このような好運は稀有としても、合格後の榮達を思えば、貧乏暮しにも耐え、やがては手段を選ばないという心境にもなるう。

金持の金老大は、前途ある人物を婿に迎えたいと望んでいるが、今は廢業しているとはいえ、祖先が乞丐の團頭であったため、名門舊族には相手にされない。ふつうの職業の相手では將來も知れているので、ぜひ士人と願っている。

兩親を亡くし、貧乏のため結婚できずにいた莫稽は、この縁談を持ちこまれると「我今衣食不周、無力婚娶、何不俯就他家、一舉兩得、也顧不得恥笑」と考える。友人たちも「莫稽貧苦、無不相諒、到也沒人去笑他」と同情を示し、無事結婚する。その後、古今の書籍を價を問わず揃えてもらえるので、二十三歳で合格する。

乞丐は「娼・優・隸・卒」の四種の賤民と同列ではないが、一般の良民からは區別される職業であるため、結婚式に招かれなかった乞丐が五六十人も押しかけて座を白けさせたり、合格後は「金團頭家女婿、做了官也」などひやかされて、莫稽は後悔する。赴任の途中で妻を河中に突き落し、改めて再婚しようとする。（以下省略）（「金玉奴棒打薄情郎」古27）

乞丐の團頭の婿になることは何を意味するか、莫稽は當然承知していたが、「冠蓋榮身」の魅力に勝てず、それ故「何不俯就他家」の道を選んだのである。もともと夫婦の間に障害となったのは、職業の貴賤という社會的な偏見

である。その解消は、妻を水中から助けた莫稽の上官の許徳厚が、義女として再嫁させることによって達成されるが、説書人は金玉奴が許公夫妻を眞の親として仕え、自分の両親も迎えて世話をし、許公のために喪に服する貞節な女性と描くことによって、出身の問題を無視している。この物語の結着は「姻縁前定枉勞争」としているが、要は婦徳であり、夫婦愛であると主張したがっているように見える。

こうした受験の苦勞を、實在の人物、たとえば王安石の場合は「此人目下十行、書窮萬卷。……方及二旬、一擧成名」(通4)、蘇軾の場合は「一擧成名、官拜翰林學士。此人天資高妙、過目成誦、出口成章」(通3)とこともなげに片附けているが、李白については「精通書史、出口成章」(通9)であり、賀知章からの「請托」が南省の試官楊國忠と監視官高力士に届けられたが、「納賄」をしなかったため不合格にされたという。

\* 不願文章中天下 只願文章中試官

天子の氣まぐれにある種の期待がかけられたように、試験官にも同様の期待をつなぐのが「只願文章中試官」(通9・恆32)である。

科擧の試験が厳正に行われるとしても、試験官の文章観による好みに左右される面があるとすれば、「讀書過萬卷、下筆如有神」(通24)であろうと、合格の保證はない。いっぽう、見失った戀人のことを思いつめて心ここにあらずの状態で受験して、合格する例もある。(恆32)

こうした不安な状態で續く受験生活の末、試験官の意に反して「一舉成名」をかちえた物語がある。

桂林府の鮮于同は八歳の時に神童に推され、十一歳で入學すると附學から増廣を飛びこして廩生となる秀才であったが、その後、貢生の資格で任官すれば知縣どまりなので、受験を續け五十七歳になる。「胸藏萬卷、筆掃千軍」と自負して董仲舒も司馬相如も眼中にないが、彼の文才を認める試験官にはめぐり合わず、若者たちからは怪物として嘲笑され敬遠される。

ここに、若年で任官し、若者を合格させれば任期が長いので將來世話にもなれるが、老人は前途も知れており採用しても無駄であるという偏見を抱いた試験官、劇遇時は鮮于同を落第させるために、わざと文字不揃いの答案を一位とする。それが宿醉の鮮于同のものであり、郷試の首席合格となる。

劇遇時は三年後の會試では審査課目を禮記から詩經に移るが、鮮于同は詩經で合格の夢を見、禮記から課目變更して受験し、またも合格する。(「老門生三世報恩」(通18))

以下劇遇時への鮮于同の報恩譚なので省略するが、二十餘歳若い劇が先に死に、鮮于同は九十七歳の長壽を保つ。説書人は「大抵功名遲速、莫逃乎命。也有早成、也有晚達。早成者未必有成、晚達者未必不達」と運命論で説明する。

實在の人物である。盧梈も「八歳那能屬文、十歳便嫻詩律、下筆數千言、倚馬可待。人都道他是李青蓮再生、曹子建後身」とうたわれる才能の持主であったが、數回連續して「不中試官之意」、具眼の試験官に逢わなかったため「功名」に望みを絶ち、すね者になる。(「盧太學詩酒傲王侯」恆29)

前者は長い受験生活の中で、偶然によって試験に合格した男の物語、後者は受験を斷念した男の物語であるが、説

書人は科擧のために浮身をやつす讀書人を皮肉な目で見、「父母官」が必ずしも理念通りでない根據として、その選出方法のでたらめな實態をあばくことが一つ、またこうした偶然性が民衆の因果論を裏づける證據の一つとするのである。

\* 納粟入監

科擧の試験に合格するのが、このように困難であり偶然に左右されるとすれば、より確實な方法を求めるのが人情であろう。

その一つが「父蔭」である。宋の南渡の際、民兵を率いて天子を護送した功績により、その息子が任官する例が「單符郎全州佳偶」(古17)に見える。しかし、これは例外に屬し一般化はしにくいことである。

「父蔭」より確度が高いのが「納賄」による買官である。文盲の男が郷試に「納賄」して合格し、會試受験のため上京するが、學問よりも花柳の巷に入りびたり、悪い病で死んだ例が通17の挿話として語られる。

前述の李白の場合は、李白の謝禮を賀知章が一人占めして楊國忠、高力士へ「納賄」がないと思つた二人の試験官が、豫め不合格ときめていた例であるが、唐寅の場合(唐解元一笑姻縁通26)は、問題漏洩をしていた試験官が、嫌疑を打ち消すため文名の高い人物を首席及第させようとし、唐寅を充てようとしたところ、酒席で唐寅がその事情を洩らしたために試験官もろとも下獄された挿話がある。「納賄」による合格は、もとより後暗さをまねかれず、また必ずしも成功を期待することはできない。

しかし、天子自身の「賣官」ということになれば、恐れるものはない。「闇陰司司馬貌斷獄」(古31)中に、次のよ



うな叙述がある。

自光和元年、靈帝始開西邸、賣官鬻爵、視官職尊卑、入錢多少、各有定價。欲爲三公者、價千萬。欲爲卿者、價五百萬。崔烈討了傅母的人情、入錢五百萬、得爲司徒。後受職謝恩之日、靈帝頓足懊悔道、好個官可惜賤賣了。若小小作難、千萬必可得也。又置鴻都門學、敕州・郡・三公、舉用富家郎爲諸生。若入得錢多者、出爲刺史、入爲尙書。

これを合法化し、組織的に實施したのが、明朝も末に近い萬曆年間に、神宗が在位四十八年のうちに平定した三つの戦亂——日本・關白平秀吉、西夏・哮承恩、播州・楊應龍——の戦費による國家財政の逼迫を緩和するために、戶部の奏請をいれて臨時に許した「納粟入監之例」である。

原來納粟入監的、有幾般便宜。好讀書、好科學、好中、結末來又有個小小前程結果。以此宦家公子・富家子弟、到不願做秀才、都去援例做太學生。自開了這例、兩京太學生、各添至千人之外。（「杜十娘怒沈百寶箱」通32）

という次第で、金錢によって資格を買い取ることに後めたさを感じないですむ道が開かれたということになれば、「少時讀書不就、將銀援例納了個令史、就參在本縣戶房爲吏」（「金令史美婢酬秀童」通15）のように、學問によって官になる見込みのない男も、下級吏員の職を得て、名譽欲を満足させることができる。それはかりか「納粟」によって得られる地位は、民衆と直接接觸し、收賄に最も都合のよい職であることが多いので、一應の才覚があれば、決して損な投資ではないということになる。

「納粟監生」が、山西平陽府洪同縣の縣丞に選任される（「張廷秀逃生救父」恆20）が、それに對する説書人の解

説は、「這個縣丞、乃是數一數二的美缺、頂針握住」であつて、役得が多く誰しも望む職であるという。その證據に、ある縣丞の家を襲つた強盜を捕えた時に、贓物が少いので捕り手を訊問するせりふ「聞得龐縣丞十分貪汚、囊囊甚多、俱被劫去、如何只有這幾件粗重東西。其餘的都在那裏」を見ると、「縣丞」が「十分貪汚」であれば「囊囊甚多」であることを訊問に當つた役人自身が認めてことになる。これを見れば、「冠蓋榮身」もさることながら、役得などの實利に、より大きく比重がかけられていたことがわかる。従つて没落した主家のために、誠心誠意家産の回復をかけた忠僕が、成功後に主家の二人の息子に先生を迎えて勉強させ、當然の如く「納粟」して「監生」としたのは、「優免若干田役」が目的であつた。（「徐老僕義憤成家」恆35）

以上は、とにかく成功した例であるが、金錢の授受にはトラブルがつきものである。たとえば「桂員外窮途懺悔」(通25)の場合を見ると、桂遷發跡までの由來は省略するとして、發跡後に考えたことは、

「田多役重、官府生事侵漁、甚以爲苦」の状態から脱け出すために「入粟買官」によつて「冠蓋榮身」、あわせ「官戸免役」の特權を得るのがよいとすすめられてその氣になり、幹旋者のいうままに三千金を都合して渡すと、さらに二千金入用といわれ、借金をしてそのうち千兩だけを渡すと、それらを着服した幹旋者が自分のために買官して親軍都指揮使となり、不足分千兩の借用證書を持參して殘金をも巻きあげる。桂遷は詐欺にあつて買官に失敗したばかりか、借金を辨濟するために家産を賣り拂う破目になる。

この物語は、桂遷の命を救つた施濟に對する桂遷の背信行爲の應報譚として描かれた挿話である。もちろん幹旋者も、後に收賄で彈劾され獄死する後日談を、説書人はつけ加えることを忘れてはいない。

この「納粟入監」は「讀書成器」を迂遠として選擇された行爲なので、「把書本撇開、穿着一套闊服、終日在街上搖擺」（「張廷秀逃生救父」恆20）で終るのが實狀であつたようである。それについての例は幾つか擧げることができる。

自小納粟入監、出外都稱相公、一發縱蕩了。專一穿花街、串柳巷、喫風月酒、用脂粉錢、眞個滿面春風、揮金如土。（「趙春兒重旺曹家莊」通31）

自幼讀書在庠、未得登科、援例入於北雍。因在京坐監、與同鄉柳遇春監生、同遊教坊司院內。（「杜十娘怒沈百寶箱」通32）

このように取り巻きの「閒漢」たちにおだてられて、お金を湯水の如くに使い、花柳の巷に入りびたるぐうたら息子というのが、どうも通り相場という感じである。その擧句は、

不去溫習經史、終日穿花街過柳巷、在院子裏表子家行樂。……闌出一身廣瘡。科場漸近、將白金百兩送太醫、只求速愈。太醫用輕粉劫藥、數日之內、身體光鮮、草草完場而歸。不尙半年、瘡毒大發、醫治不痊、嗚呼哀哉、死了。

（「鈍秀才一朝交泰」通17）

のように、悪い病氣で生命を落す例もある。説書人の目から見た「納粟監生」は、「世人切莫閒遊蕩、遊蕩從來誤少年」（恆17）の諺の通り、「獸子」（通31）あるいは「蠢才」（通32）とよぶしかない者である。

いっぽう官僚への捷徑である「納粟入監」のすすめを固辭して、正攻法で受験勉強にはげむ男には、「婚宦」双全の結末を用意する。「鈍秀才一朝交泰」（通17）の馬任がそれである。

馬任は「十二歳遊庠、聰明飽學」であつたが、算命先生の占いの如く——二十二歳から運命が下降し、家産をつぶすのみならず一命も保障し難い。三十一歳を過ぎれば五十年の榮華を迎える——科擧に合格しないばかりか、宦官王振彈劾に關係して父親は免職となり、さらに在任中に收賄したと誣告されて家産はそっくり沒收される。

いっぽう婚約していた友人の妹黄六嬢は、兄の死によって家産の一部を手に入れると、馬任の行方を探し、寺の寫經生となつてゐるのを發見して次のように傳言する。

我如今便與馬相公援例入監。請馬相公到此讀書應擧、不可遲滯。

それに對する馬任の回答、

小姐盛情、我豈不知。……向因貧困、學業久荒。今幸有餘資可供燈火之費。且待明年秋試得意之後、方敢與小姐相見。

その年「土木之變」（明の英宗が蒙古征討軍を進めて捕虜となつた事件）が起こり、王振が失脚すると、馬任は父親の名譽と自分の資格の回復を上奏する。翌秋の郷試に合格して前約通り黄六嬢と結婚し、その翌春の會試にも合格してとんとん拍子に出世する。禮・兵・刑部尙書となり、六嬢は一品夫人、二人の息子も科擧に合格というサ・ービスまである。

運命が開けたのは、三十二歳であつたといふのは、算命先生などを持ち出した説書人のおしゃべりに過ぎないが、「萬般皆是命、半點不由人」（通17・恆27）「萬般皆是命、半點盡由天」（通12）といふ運命觀によつてしか事態の急變を説明できないし、また納得しない民衆の感情を代辯するものであろう。

このような試験の不合理に對する説話人の評論は、次の文に示されている。

漢朝取士之法、不比今時。他不以科目取士、惟憑州郡選舉。雖則有博學宏詞・賢良方正等科、惟以孝廉爲重。孝者孝弟、廉者廉潔。孝則忠君、廉則愛民。但是舉了孝廉、便得出身做官。

若依了今日的事勢、州縣考個童生、還有幾十封薦書。若是舉孝廉時、不知多少分上鑽刺、依舊是富貴子弟鑽去了。孤寒的便有會參之孝、伯夷之廉、休想揚名顯姓。

只是漢時法度甚妙。但是舉過某人孝廉、其人若果然有才有德、不拘資格、驟然升擢、連舉主俱紀錄受賞。若所舉不得其人、後日或貪財壞法、輕則罪黜、重則抄沒、連舉主一同受罪。那薦人的、與所薦之人、休戚相關、不敢胡亂。所以公道大明、朝班清肅。(「三孝廉讓產立高名」恆?)

これは理想化された漢代——當時は建前通りであつたと前提し——と、腐敗した當代の實態とを比較して批判する方法をとっている。この種の論法は、支配階級内部でくり返された綱紀肅正運動がそうであつたのを踏襲したものであり、庶民の側からする批判ではないが、にも拘らず説得的であつたと思われる。

體制内にある民衆は一般に保守的であり、科擧において「不拘資格、驟然升擢」というように人材が拔擢されて「公道大明、朝班清肅」が達成されることを期待しているのである。ひるがえって現在を見れば、官僚間の縁故をたどる「幾十封薦書」や、「鑽刺」といった手段で「富貴子弟」に官界を獨占されているのが實狀なので、くり返し彼らの行狀を題材にとりあげ、聽衆に共感を求めたのも當然といえよう。

\* 出儒入墨

讀書人が科擧の試験に合格することは、士人の立場からすれば、理想の政治を實現して天子を補佐することである<sup>(19)</sup>が、受験準備の間に、このあるべき本來の道から外れて他へ逸脱したものを「出儒入墨」(恆12)とよんでいる。正統から異端へ走ったという意味である<sup>(20)</sup>。

これは三つの類型にわけることができる。

(1) 不第——逸脱

この型の典型は「佛印師四調琴娘」(恆12)の謝端卿である。彼の志は「爲應擧到京、指望一擧成名、建功立業」にあるので、天子の獨り合點で官僚への道をとざされたことは「心下十萬分不樂」であるが、結局は僧侶とされてしまふのである。

「唐解元一笑姻縁」(通26)の唐寅は、試験の内幕を不用意に漏らしたため投獄され、その後は詩酒に溺れて仕官の望みを絶つ。

「盧太學詩酒王侯」(恆29)の盧柟も「因才高學廣、以爲擢青紫(大官となること)如拾針芥」と考えているが、「錦繡般文章」も試験官の意にならず、連續して落第し、科擧に見限りをつける。その他にも、受験を諦めて漁師となる話(通39)や商人に轉向した話(恆33)などもあるが、唐寅、盧柟という實在の人物については、明代讀書人の新しい生活形態を主題としている。

唐寅は、舟遊び中に一目惚れした華學士の侍女を妻とするため、僞名で華家に雇われて勤勉に務め、認められて目的を達すると妻を連れて歸郷する。その生活は、

(人)得唐解元詩文字畫、片紙尺幅、如獲重寶。其中惟畫、尤其得意。平日心中喜怒哀樂、都寓之於丹青。每一畫、

争以重價購之。

とあって、人々が争って購う書畫を賣ることによって成立っている。

盧栢の生活ぶりは、

家資巨富、日常供奉、擬於王侯。所居在城外浮邱山下、第宅壯麗、高聳雲漢。後房粉黛、一個個聲色兼妙。又選小奚秀美者十人、教成吹彈歌曲、日以自娛。至於僮僕廝養、不計其數。

宅後又構一園、大可兩三頃、鑿池引水、疊石爲山、制度極其精巧、名曰嘯圃。……不惜重價、差人四處構取名花異卉、怪石奇峯。落成這園、遂爲一邑之勝。

その交友は、

惟與騷人劍客、羽士高僧。談禪理、論劍術、呼盧浮白、放浪山水、自稱浮丘山人。

この描寫からみると、脱俗の石崇といったところであろうか。試験には合格しなかったが、才名は天下に聞えているので、當地の知縣から交際を求められ、そこから生じたトラブルが物語の主題であるが、ここでは省略する。

この兩者に共通するのは、その性格である。

放浪不羈、有輕世傲物之志。(唐寅)

放達不羈、有輕財傲物之志。(盧栢)

これは説書人のきまり文句でもあろうが、「詩才豪放、不修小節」と唐寅については慎重さの缺ける點、「才高天下、眼底無人、天生就一副俠腸傲骨、視功名如敝屣、等富貴猶浮雲」と盧栢については人を人と思わぬ傲慢さにおいて、それぞれ對人關係が原因となって展開する物語に、微妙な相違を示して伏線としている。

(2) 不第——成名——罷免

この型の變型として、受験不第であるが才名によって官を與えられ、「詩才高傲」のため罷免される柳永と李白を主人公とする物語がある。

柳永は琴棋書畫にも通じ、とくに音律に詳しかったので、受験にくり返し失敗すると花柳の巷に出入し、名妓らの寵兒となる。

才名があがって浙江の餘杭縣宰に推薦されると「爲官清正、訟簡詞稀」の善政を施し「與朝家出力」の素志を果す。

任期滿了後、屯田員外郎、翰林員に推薦されるが、宰相呂夷簡の求めに應じて作った賀壽の詞を届ける際に紛れて入った詞の「我不求人富貴、人須求我文章」の句が怒りを買う結果となり、任官を拒否される。

そこで柳永は、詞人・官人・仙人の「三變」と自稱し、玉帝から霓裳羽衣曲の改作に召されたといつて死ぬ。

(「衆名姬春風弔柳七」古12)

期待した賄賂が來ないため楊國忠・高力士は李白を不合格にするが、たまたま渤海國から寄せられた國書を解讀できる人物が朝廷で得られず、賀知章の推薦によって特賜で進士及第の資格が李白に與えられる。天子の面前で國書を翻譯すると、玄宗は即日翰林學士に任命し、回答の起草を命じる。<sup>(2)</sup>

その後、献上した清平調三章の詞句が楊貴妃の忌諱に觸れて追放され、「勅賜李白爲天下無憂學士、逍遙落托秀才、逢坊喫酒、遇庫支錢、府給千貫、縣給五百貫。文武官員軍民人等、有失敬者、以違詔論」の牌を授けられ、諸



國を放浪する。「李謫仙醉草嚇蠻書」通9)

柳永、李白など實在の人物は、講史の場合と同様に虚構が困難なため、結末は昇仙させて人間の手の届かぬ非凡な人物とし、説書人の合理主義を満足させている。

(3) 不第——逸脱——成名

受験生活の間に障害が生じて科擧の道から逸脱したが、再出發して成功するという型の物語がある。説書人の腕の見せ場は、その障害の設定と打開の方法にあり、障害の原因は主として愛情と金錢のもつれである。

妓女との愛情は、「姐愛俏、媽愛鈔」(通24・恆3)「小娘愛俏、鴛兒愛鈔」(古12)が示すように、妓女は男ぶりのよい若者に熱をあげるが、鴛兒は「貪財無義」(通32)の本性をむき出しにして「以利相交者、利盡而疎」(通32)を當然とし、「前門送舊、後門迎新」(古17・通32・恆3)の規矩に従わぬ妓女存在を認めない。

妓樓に入りびたつて才能を埋もれさせる話は多く(「杜十娘怒沈百寶箱」通32もその一例)、再起できるか否かは、男の「改過遷善」(通24)の意志力の問題でもある。次の物語は、唐の傳奇『李娃傳』のヴァリエーションである。

妓女と馴染んで無一文となり、鴛兒に放り出された男が、妓女の奇智<sup>(22)</sup>によって歸郷し、奮起して科擧に合格、任地に赴くと、その妓女が殺人容疑で下獄している。そこで職權を利用して事實調査をし、無實を明らかにして改めて妾を迎える。「玉堂春落難逢夫」通24)

歸郷して父親の叱責のもとに受験生活に戻り、妓女との誓を破って父のすすめる縁談に應じ、科擧の試験に合格するという話の進行は、妓女との愛に溺れたのが一時の迷いとして片附けられかねない物語であって、主題は、誓いを

守り抜いた妓女の愛情の強さと苦難を切り抜けた「有智」にある。この二人の運命を、冤罪に泣く妓女と偶然同地に赴任した男との出会いの形をとって團圓に導く物語の構成は、やや御都合主義ながら聴衆を満足させたものである。

良家の娘との愛情をからめて不第——逸脱——成名の物語を構成するものもある。

杭州に受験に來て失敗し、元宵節で見染めた娘に懸想して意氣投合し、遂に驅落ちに成功するが城門を出る際に雜鬧中ではぐれる。三年後、試験に合格した男が上京の途中で妻と再會し、改めて娘の兩親に詫びを入れると、兩親の側では死んだと思っていた娘との再會の喜びに併せて、りっぱな婿まで得て、萬事めでたくおさまる。（「張舜美元宵得麗女」古23）

この物語で説書人は、元宵節の杭州の賑わい、その中で行きずりの男女の戀の顛末、城門の雜鬧などに南宋の都の雰圍氣を語って聴衆をひきつけたのであろう。男との驅落ち、郷里へ歸って兩親との再會は、唐の傳奇「離魂記」のバターの繼承である。

良家の娘の戀愛は、親權優位<sup>(23)</sup>であって「無媒苟合、節行已虧」（恆8）あるいは「無媒私合、於禮有虧」（恆10）など、「野合」の誘りを免れるための結婚形式にしばられる士人階層にあっては、許されることではない。この觀念と現實の合間を縫って、説書人はハッピー・エンドを用意することにより「誨淫」の非難を避けようとする。司馬相如・卓文君の故事を是認する風潮を援用し、「一擧成名」によって過去の過失を美談に轉化させる道を開いたのである。

この型の物語は、逸脱の部分を複雑にするほど、「説話」の効果を高めることができる。

土地を失った地主の家に生れた廷秀、文秀の兄弟は、父親が家具職人となったので、飢饉の年に學業を捨て——不第ではない——家業を手傳い、廷秀は玉器店の主人に見込まれ過繼となる。

玉器店には二人の娘がおり、姉婿の趙昂が遺産を繼承するつもりでいたが、妹婿ができたので、「門戸不當」を理由に反対する。主人は廷秀の人物を見込んでいたので「會嫁嫁對頭、不會嫁嫁門樓」といつて取りあげず、五百兩の金を贈って廷秀の父親に反物屋を開かせる。そこで趙昂は、口實を設けて廷秀の父親を強盜の一味と誣告し、廷秀を家から追い出す。

廷秀兄弟は強盜事件の真相を知り、父親救出のため鎮江府へ訴えようとするが、趙昂の策略で簞卷きにされて長江に投げ込まれる。幸運にもそれぞれ救助され、文秀は商人の義子となる。廷秀は俳優の一座に救われ、邸を巡回上演中に高官の目にとまって義子となる。

二人は再び受験勉強にはげみ、同時に科擧に合格、赴任の途中郷里に歸って趙昂の惡事を究明し、父親を獄から救出する。

改嫁を迫られても貞節を守った妹娘は、めでたく廷秀と結婚し、趙昂は「打六十、依律問斬」、妹娘は縊死。文秀は廷秀の義父の娘と結婚し、それぞれの息子が恩義を受けた家名を繼いで、因果のバランスはすべて完璧に團圓する。（「張廷秀逃生救父」伍20）

この物語は、受験生活からの逸脱が本人の心得違いによるのではなく、貧乏のため翻弄され、究局的には獄中の父

親を救出するために科擧に合格、任官しなければ解決できぬように構成されている。

任官して得た権力によって解決するのは、「玉堂春落難逢夫」(通24)と共通の趣向。

改嫁をこばんで自殺まではかり、最後に幸福を得た妹娘は、「陳多壽生死夫妻」(恆9)の朱多福型。

策略を弄して却って我が身の墓穴を掘る趙昂は、「李汧公窮邸遇俠客」(恆30)の房徳型。

河に投げこまれて助けられ義子となるのは、「金玉奴棒打薄情郎」(古27)の金玉奴型。

金を貸してやったことが裏目に出て災難が及ぶのは、「陳御史巧勘金釵鈿」(古2)に見える趣向。

遺産の獨占を計って裏目に出るのは、「膝大尹鬼斷家私」(古10)の倪善繼型。

捕手が容疑者逮捕に便乗して金品を掠奪するのは、「盧太學詩酒傲公侯」(恆29)に見える趣向。

誣告によって冤罪に陥れるのは、「李玉英獄中訟冤」(恆27)の趣向。

以上のような複雑な構成要素も、話本の類型を組合わせたものに過ぎず、明代のこの時點で、とくに新しい人物形象、モラルの創造に成功した作品ではない。

\* 急流勇退

唐の傳奇『枕中記』に理想的な官僚の生涯が描かれている。

一 名家の娘(盧生の場合)は「五姓」の一人、清河の崔氏)と結婚すること。

二 進士の試験に合格すること。

三 地方官としては民生のために治績をあげ、民衆から頌徳碑を建てられること。

四 外敵の侵入に對しては將軍として出征し、敵を撃滅して國威をあげることに。

五 中央政府にあつては宰相として天子を補佐し、賢相とたたえられること。

六 自身は豪華な生活をし（御馳走を食べ、美女に圍まれ、長壽を保つ）、子孫（五男二女が理想）が繁榮すること。

これが山東の農夫盧生の希望「士之生世、當建功樹名、出將入相、列鼎而食、選聲而聽、使族益昌而家益肥」が十分に達成された姿である。これを夢の世界に設定したのは、もちろん實現性に乏しい夢物語であると同時に、醒めてみれば、さほど楽しいことでもないことを會得させようとの意圖から作られたことを示さんがためである。

とくに作品中で二度にわたつて左遷の憂き目を見るのは、反目、中傷の絶えない官界の實情を反映したものであり、傍目で羨むほどのものではないことを如實に示している。

晩年の盧生が「屢乞骸骨」したにも拘わらず、容易に許可が得られなかったのは、たまたま玄宗の信頼が厚かったからであり、またそれ故に生涯を無事に終えることができたのであるが、官僚にとつて、いつ官界から身を引くかの判断は非常に難しく、その時期を誤ると汚名を後世に残すことになる。

説書人は、それを「急流勇退」（古34・通4・通18・通31・恆2・恆3・恆11）とよんで、その難しさを次のようにいう。

周公恐懼流言日 王莽謙恭下士時

假使當年身便死 一生眞僞有誰知

つまり、武王の病氣の身代りになろうと天に祈つた祭文が発見される前に周公が死んだならば、管叔・蔡叔の流言に

よって周公は謀反を計畫した悪人とされたであろうし、人心を掌握して天下を奪おうとした王莽が、事を起す前に死ねば、善政を布いた賢相として青史に名を留めたであろう、というわけである。すべて人間の評價は「蓋棺論始定」であって、一時の毀譽褒貶によって「一生眞僞」を判断することはできないのである。（「拗相公飲恨半山堂」通4）  
 従って、得意の絶頂で致仕し、名を後世に留めえたとしても、それはやはり偶然にすぎず、「萬般皆是命、半點盡由天」（通12）あるいは「半點不由人」（通17・恆27）の諺が示すペシミズムを根底に据え、それをテコにしてなお行為の選擇を人間の意志の發現であると前提し、物語は構想される。

「急流勇退」の典型は、作品中の挿話として語られる張翰の逸事である。

張翰在朝、曾爲顯官、因思鱸魚蓴菜之美、棄官歸鄉、徹老不仕。（「李公子救蛇獲稱心」古34）

「顯官」と「鱸魚蓴菜」をはかりかけ、後者のために前者を棄てる無欲さが、祠堂に祭られ「高士」としての尊敬を集める。

功成り名遂げての後の棄官は「老門生三世報恩」（通18）と「趙春兒重旺曹家莊」（通31）が同様であるが、前者は六十一歳で登第、八十歳で浙江巡撫になり「告老致仕」であるから順當な退官といふことができよう。後者は、賢妻の才覚で貯えられてきた千兩によって買官し、福建同安縣丞、泉州府知縣、潮州府通判を歴任するが、退任を夢みた一事件が現實に生じた所で「前程出處、皆由天定、非偶然也」と悟り、「知足不辱」と考え「急流勇退」する。夢を媒介するのは、説書人の目には自發的行爲と見ていなかったことを意味しよう。辭職して郷里へ歸る際「百姓攀轅臥轍者數千人」というのは、『枕中記』の三に當るが、「三任宦資約有數千金」というのは、夫の「改過之善」妻の「贊

助之力」の功にしているが、民衆に慕われる清官の収入を示すとすれば、「書中自有千鍾粟」が證明されたことになり、役人にはなるものだという思いに驅られよう。

實在の人物、王安石については、

王荊公、諱安石、字介甫。初及第時、大有賢名。平時常不洗面、不脫衣、身上虱子無數。（蘇小妹三難新郎」恒  
11）

と紹介し、蘇洵の目には「其不近人情、異日必爲奸臣」と映ずる人物に描かれている。同様の敘述は、

李承之見安石雙眼多白、謂是奸邪之相、他日必亂天下。蘇老泉見安石衣服垢敝、經月不洗面、以爲不近人情。

（通4）

とあり、いっぽう、

韓魏公名琦者、見安石頭面垢汗、知未盥漱、疑其夜飲、勸以勤學。安石謝教、絕不分辯。後韓魏公察聽他徹夜讀書、心甚異之、更誇其美。（通4）

と支持者のあったことも述べている。

宰相となった王安石は新法を立案し、「天變不足畏、人言不足恤、祖宗之法不足守」と稱して「斥逐忠良、拒絶直諫。民間怨聲載道、天變迭興」も物ともせず推進する。ところが、死んだ息子の法要の際人事不省となり、その間に地獄へ行って新法の失敗による民衆の恨みを一身に受けた息子の訴えを聞き、辭職の決意をする。（通4）

異常な體驗を契機に設定している點で、通31と同じ趣向を用いているが、これは時期を失した退官であって、「此

人(王安石)目下十行、書窮萬卷。名臣文彥博、歐陽脩、曾鞏、韓維等、無不奇其才而稱之。方及二旬、一舉成名。初任浙江慶元府鄞縣知縣、興利除害、大有能聲」の際にもし死ねば、——あるいは「急流勇退」すれば——「飲恨而終」ということにはならなかったであろうと説書人は見るが、それも結局「事皆前定、豈偶然哉」という解釋で一貫させている。

「急流勇退」を利用して二人の弟を出世させたという手のこんだ例もある。

許武は早く両親に死別し、一家を支え二弟の教育に専心し、「孝弟許武」の評判を得て徵議郎に召される。數年經て御史大夫になった所で病氣と稱して退官し、郷里に歸つて財産の多くを獨占し二弟を分家させる。今度は兄に従順な二弟の評判が擧り、召されて丹陽郡太守、吳郡太守となつた所で許武は二弟を郷里によび歸し、改めて財産を公平に分與する。(「三孝廉讓產立高名」恆2)

説書人は、當代の家産分與に兄弟の争いが多く「微利相擧家共傾」の愚を避けるための教訓として語つたものかもしれないが、それにしては『後漢書』許荆傳を敷衍したに過ぎず、漢代と當代の官吏採用法の比較にしては、議論はあるが描寫はないといった中途半端な作品であつて、朝廷取士の法の裏をかいたという痛快さもない。

辭職の願が許されず、却つて身に危険が及ぶ懼れのある時は、方法を講じて保身をはかる必要がある。

斐度は吳元濟の亂を平定した功績によって晉國公に封ぜられるが、憲宗の土木工事や長生藥への執心を諫めて不興を買い、官界に見切りをつけて辭職を願ひ出る。ところが、許可が得られないばかりか、疑われる結果となり、



酒色に踏晦して朝政に口を出さぬこととし、餘生を安樂に暮そうとする。（「裴晉公義還原配」古9）

天下が太平になると、天子は宮殿の増改築や池園の改修に着手して國費を浪費し、それに阿諛する廷臣が民衆を擽取して政情を不安にする。また不老長生の藥に大金を投じるのも、天子の行狀として普通に見られることである。朝政に與るものとしては、諫言をするのが當然であるが、聽き入れられない成行も自然である。その際「急流勇退」を決意するのは、反覆常なき政界に身を置く者の保身の術でもある。

新法・舊法が争った王安石と蘇氏一族との争いは、説書人の同情は蘇氏にあり、従って王安石には手後れの勇退をさせたが、蘇東坡には、得意の時に佛印禪師からの二字一連の「急流勇退」の勸告をさせている。この謎めいた長歌は、翰林院に兄を訪ねた蘇小妹によって解かれ、才女の一挿話とされているが、佛印の蘇軾を思う心を通して、説書人の加擔を見ることができよう。（「蘇小妹三難新郎」恒11）

以上に見られるように、官途に就くこと、官界から身を引くことの困難さについて、説書人は執拗に話柄とする。それは「父母官」であるべき官人の出處進退が、民衆の生活に直接の影響を與えるからである。従って「清官」に対する期待の強いのが當然であるが、「三言」中では多くは語られない。むしろ吏對民の關係の方が、より直接的なために「清官」の問題を含め稿を改めて論じたい。

1 中國における遺跡の發掘によつて、古代から説唱藝能などが存在したことを證明する多くの遺物が、近年發見されている。たとえば、一九五七年四川省成都天回山の三號墓から發掘された「擊鼓説唱俑」は後漢末の説唱藝能の存在を示すものである。

文獻による研究では陳汝衡『說書史話』(一九五八年)、胡士瑩『話本小說概論』(一九八〇年)がくわしい。

- 2 一九六七年、上海市嘉定縣の宣氏の墓から發掘された成化刊本の「說唱詞話」は當字・俗字が多く、讀む本としては適當でない。また鄭振鐸氏舊藏の『大唐秦王詞話』は版式はかなり整つてゐるが、回首に詩・詞をおいて「話說」で前の回と連續する形式を踏んでおり、一回讀切の體裁を残してゐる。

- 3 話本から擬話本への改作については、『清平山堂話本』と「三言」『熊龍峯刊四種小説』を對照してみれば、ある程度の見當がつくが、譚正驤校注本『清平山堂話本』(一九五七年)の「柳耆卿詩酒翫江樓記」の校注で、譚氏は「衆名妓春風風柳七」(『古今小説』卷12)と比較して改作について論じ、「古今小説綠天館主人序裏、稱翫江樓『鄙俚淺薄』、可見他是不滿意本篇而有意改寫的」と述べてゐるが、明末の「三言」以後の話本系小説に文人の手が加わつてゐることの一斑を示すものといえよう。

なお、「三言」における馮夢龍の序文には、讀書人として庶民を教化する意圖が見え、「二拍」における凌濛初の序文には、讀書人仲間の話題提供といつた趣旨が述べられてゐる。「三言」の本文中より、庶民の意識を探るためには、これらの事情を配慮しなくてはならない。

- 4 「三從」とは別の次元で「沒有婦道不成家」の諺が示すように、庶民の目には妻は家庭の要としての役割が期待されており、家庭内では「鍵」をもつ座、(仁井田陞『中国の伝統と革命』2 四四ページ)が保證されている。

- なお、女性の地位に關しては拙論(『東洋文化研究所紀要』第44冊、以下拙論1と簡稱)を参照されたい。
- 5 古30の正文は、和尙の轉生譚、佛印禪師・蘇東坡の交友譚の二話が結合されて因果を論じたものであり、『全相平話三國志』の冒頭の轉生譚から本論への形と類似する。恒12は「入話」を持たぬ點で擬話本に近く、兩解釋を原話の體裁から見ても定着時期の先後が考えられる。諸家の作品成立時期の推定によれば、古30は元・明あるいは嘉靖以前とし、恒12は明と推定されてゐる。(拙論1附表1参照)

- 6 この詩は「歲暮歸南山」と題す。(四部叢刊・孟浩然集卷3所載)

- 7 この入話の故事は『唐才子傳』卷2に見える。

- 8 高宗に関する類話に、「汪信之二死救全家」古39の入話に、酒肆で詞を見た高宗が子國寶を翰林待詔に拔擢する話がある。
- 9 「未去朝天子、先來謁相公」(通3)は飾り物的天子よりも實力のある宰相の方へまず挨拶するという意味であるが、天子を別格とする意味がないでもない。「聖天子百靈助順、大將軍八面威風」(通21)の場合も、天子を人間と次元の異なるものに位置づけているようである。
- 10 この入話の故事は『說苑』復讐に見える。『說苑』の結論は「此有陰德者、必有陽報也」であつて莊王の度量に重点をおくが、説書人は妾を非難する語氣がある。
- 11 妾である弄珠兒には、「從一而終」を盾にして他人の妻とされることを拒否する権利はない。妾は士氣を鼓舞するために、食糧の盡きた城内の兵士の前で殺され食べられることさえある。(『唐書』忠義傳、張巡の例)
- 12 「李謫仙醉草嚇蠻書」(通9)に玄宗・楊貴妃が登場するが、主題は李白の行狀にある。
- 13 これらの諸書は魯迅『唐宋傳奇集』および「稗邊小綴」に本文と解説がある。譚正璧『三言兩拍資料』にも本文を引く。
- 14 女性を主人公とする殺と淫には「計押番金鰻產禍」(通20)があるが、この場合は金明池の水神(金鰻)を殺して食べたたりによるという合理化がされており、天子の氣まぐれによる殺と淫とは性格が異なる。ただし、故事中の興味は等質といえよう。
- 15 「皇帝論流倣、明年到我家」(西遊記7回)あるいは「哥哥便倣皇帝、教盧員外倣丞相、我們都做大官、殺去東京、奪了鳥位子……」(水滸傳67回)に見られる、仁徳を失つた天子はとりかえてよいとする主張は「三言」には見られない。
- 16 小説の編者・作者にとつても同様であつて、別に論ずる予定であるが、たとえば『金瓶梅詞話』の欣欣子序に、「上智の士は無爲自然の理法にかなつているので、人間のもつ『七情』に煩わされることはない。それに次ぐ者は『理』をもつて克服する。しかし、一般の平凡人は『富貴』にあこがれ『哀怨』をにくむ。……たとへば『房中の事』は人の好みまた憎むことであるが、『堯舜でもなければ聖賢でもない』凡人は、住居、什器、美女、服飾、戀愛、愛欲などの誘惑には勝てない。しかし欲望に身を任せれば「樂極必悲生」で、善因善果、惡因惡果の理法を逃れられないことを、この作品は教えてくれるであろう」とあるのは、その一例である。
- 17 俗講僧の文淑がしばしば「淫穢鄙褻」を理由に都から追放されたというが(『因話錄』卷4)民衆に迎合すれば、その成行

は自然であつたらう。

18 民衆にとつては、政策の變化は常に悪い方向に働くことは、改めて述べるが、それを端的に示すのは「寧爲太平犬、不爲亂離人」(古18・恆3・恆19)であり、先儒のいう「一治一亂」を「一、想做奴隸而不得的時代、二、暫時做穩了奴隸的時代」の二元論でとらえた魯迅は、民衆の立場から歴史を見ていたことを示している。

19 たえば、韓愈の「上宰相書」は自薦の文であるが、「化俗之方、安邊之策」を實施する能力を發揮せしめよというのが趣旨である。「仕進」には理想の政治實現への使命感があつた。

20 先秦時代の對立する思想をもつ政治集團が、儒家と墨家と墨家であつた。「儒以文亂法、而俠以武犯禁」(『韓非子』五蠹篇)は「文・武」の對立概念でそれを表している。「出・入」は、その關係の表現である。

21 李白が北方の異民族の言語に通じていたことは、出身地等から推察されるが、當時から伝えられていたことは「天寶初、召見於金鑿殿、元宗明皇帝、降輦步迎、如見園綺、論當世務、草答蕃書、辯如懸河、筆不停綴、元宗嘉之、以寶床方丈、賜食於前、御手和羹、德音褒美、褐衣恩遇、前無比儔、遂直翰林、專掌密命、將處司言之任、多陪侍從之遊」(范傳正「贈左拾遺翰林學士李公新墓碑」、『全唐文』卷614)に見ることが出来る。

22 玉堂春が王景隆を苦境から救い、山西商人沈洪から身を守る智謀については、拙論1参照。

23 「孝」と「貞」に關係は、拙論1参照。

24 「五男二女」については、『詩經』召南、何彼穠矣序の疏に「皇甫謐云、武王五男二女」、『周禮』夏官、職方氏に「正西曰雍州、其民五男二女」、『通俗編』祝詞に「五男二女」とある。また『東京夢華錄』に「凡孕婦八月、母家以盆盛粟稗、上插花朶及通草、帖羅五男二女花樣、送之」、『夢梁錄』に「催妝用五男二女花扇」とあつて望ましい子女の數としている。